

水の三日

芥川龍之介

青空文庫

講堂で、罹災民慰問会の開かれる日の午後。一年の丙組（当日はここを、僕ら——卒業生と在校生との事務所にした）の教室をはいると、もう上原君と岩佐君とが、部屋へやのまん中へ机をすえて、何かせつせと書いていた。うつむいた上原君の顔が、窓からさす日の光で赤く見える。入口に近い机の上では、七条君や下村君やその他僕が名を知らない卒業生諸君が、寄附の浴衣ゆかたやら手ぬぐいやら晒布さらしやら浅草紙やらを、罹災民に分配する準備に忙しい。紺飛白こんかすりが二人でせつせと晒布をたたんでは手ぬぐいの大きさに截きっている。それを、茶の小倉の袴はかまが、せつせと折目をつけては、行儀よく積み上げている。向こうのすみでは、原君や小野君が机の上に塩せんべいの袋をひろげてせつせと数を勘定している。

依田君もそのかたわらで、大きな餡あんパンの袋をあけてせつせと「ええ五つ、十う、二十」をやっているのが見える。なにしろ、塩せんべいと餡パンとを合わせると、四円ばかりになるんだから、三人とも少々、勘定には辟易へきえきしているらしい。

教壇の方を見ると、縄なわでくくった浅草紙や、手ぬぐいの截らないのが、雑然として取乱された中で、平塚君や国富君や清水君が、黒板へ、罹災民の数やら塩せんべいの数やらを書いてせつせと引いたり割ったりしている。急いで書くせいとか、数字までせつせと忙しそ

うなかつこうをしているから、おかしい。そうすると広瀬先生がおいでになる。ちよつと、二言三言話して、すぐまたせつせと出ていらつしやる。そのうちにパンが足りなくなつて、せつせと買い足しにやる。せつせと先生の所へ通信部を開く交渉に行く。開成社へ電話をかけてせつせとはがきを取寄せる。誰でも皆せつせとやる。何をやるのでもせつせとやる。その代わり埒らちのあくことおびただしい。窓から外を見ると運動場は、処々に水のひいた跡の、じくじくした赤土を残して、まだ、壁土を溶かしたような色をした水が、八月の青空を映しながら、とろりと動かずにたたえている。その水の中を、やせた毛の長い黒犬が、鼻を鳴らしながら、ぐしよぬれになつて、かけてゆく。犬まで、生意気にせつせと忙しうな気がする。

慰問会が開かれたのは三時ごろである。

鼠ねずみいろ色

の壁と、不景気なガラス窓とに囲まれた、伽藍がらんのような講堂には、何百人かの

罹災民諸君が、雑然として、憔悴しょうすいした顔を並べていた。垢あかじみた浴衣で、肌はだつこに白

雲のある男の児こをおぶつた、おかみさんもあつた。よごれた、薄い縹とちら袍とうに手ぬぐいの帯をしめた、目のただれた、おばあさんもあつた。白いメリヤスのシャツと下ばきばかりの若

い男もあつた。大きなかぎ裂きのある印半纏しるしばんてんに、三尺をぐるぐるまきつけた、若い女もあつた。色のさめた赤毛布を腰のまわりにまいた、鼻の赤いおじいさんもあつた。そうしてこれらの人々が皆、黄ばんだ、弾力のない顔を教壇の方へ向けていた。教壇の上では蓄音機が、鼻くたのような声を出してかっぱれか何かやっていた。

蓄音機がすむと、伊津野氏の開会の辞があつた。なんでも、かなり長いものであつたが、おきのどくなことには今はすっかり忘れてしまった。そのあとで、また蓄音機がくさりすむと、貞水の講談「かちかち甚兵衛しんべえ」がはじまつた。にぎやかな笑い顔が、そここに起る。こんな笑い声もこれらの人々には幾日ぶりかで、口に上つたのであろう。学校の慰問会をひらいたのも、この笑い声を聞くためではなからうか。ガラス窓から長方形の青空をながめながら、この笑い声を聞いていると、ものとなく悲しい感じが胸に迫る。

講談がおわるとほどなく、会が閉じられた。そうして罹災民諸君は狭い入口から、各の室へ帰つて行く。その途中の廊下に待つていて、僕たちは、おとなの諸君には、ビスケットの袋を、少年少女の諸君には、塩せんべいと餡パンとを、呈上した。区役所の吏員や、白服の若い巡査が「お礼を言つて、お礼を言つて」と注意するので、罹災民諸君はいちいちていねいに頭をさげられる。中でも十一、二の赤い帯をしめた、小さな女の子が、「お

礼を言つて」と言われるとぴつたり床の上に膝ひざをついて、僕たちのくつであるく、あの砂だらけの床板に額をつけて、「ありがとう」と言われた時には、思わず、ほろりとさせられてしまった。

慰問会がおわるとすぐに、事務室で通信部を開始する。手紙を書けない人々のために書いてあげる設備である。原君と小野君と僕とが同じ机で書く。あの事務室の廊下に面した、ガラス障しょうじ子こをはずして、中へ図書室の細長い机と、講堂にあるベンチとを持ちこんで、それに三人で尻しりをすえたのである。外の壁へは、高田先生に書いていただいた、「ただで、手紙を書いてあげます」という貼はり紙がみをしたので、直ちに多くの人々がこの窓の外に群がった。いよいよはがきに鉛筆を走らせるまでには、どうか文句ができるだろうくらいな、おうちやくな根性ですましていたが、こうなってみると、いくら「候間」や「候段」や「乍はばかりながら 憚はば 御休神下され度」でこじつけていっても、どうにもこうにも、いかなくなってきた。二、三人目に僕の所へ来たおじいさんだったが、聞いてみると、なんでも小松川のなんとか病院の会計の叔父おじの妹の娘が、そのおじいさんの姉せの倅せがれの嫁の里の分家の次男にかたづいていて、小松川の水が出たから、そのおじいさんの姉の倅の嫁の里の分家の次

男の里でも、昔から世話になった主人の俵が持っている水車小屋へ、どうかかしたところが、その病院の会計の叔父の妹がどうかしたから、見合わせてそのじいの俵の友だちの叔父の神田のざるがくちよう猿楽町に錠前なおしの家へどうかしたとか、なんとか言うので、何度聞き直しても、八幡やわたの藪やぶでも歩いてるように、さっぱり要領が得られないので弱っちまった。いまだに、あの時のことを考えると、はがきへどんなことを書いたんだか、いっとう判然しない。これは原君の所へ来た、おばあさんだが、原君が「宛名あてなは」ときくと、平五郎さんだとかなんとか言う。「苗字みょうじはなんといいば近所じゅうどこでも知ってるから、苗字は知らないが平五郎さんで、平五郎さんていえば近所じゅうどこでも知ってるから、苗字なんかなくつても、とどくのに違いないと保証する。さすがの原君も、「ただ平五郎さんじゃあ、とどきますまい」って、恐縮していたが、とうとうさじを投げて、なんとか町なるとか番地平五郎殿と書いてしまった。あれでうまく、平五郎さんの家へとどいたら、いくら平五郎さんでも、よくとどいたもんだと感心するにちがいない。

ことにこっけいなのは、誰の所へ来たんだか忘れたが、宛名に「しようせんじ、のだやすつてん」というやつがあつて、誰も漢字に翻訳することができなかつた。それでも結局「修善寺野田屋支店」だろうということになつたが、こんな和文漢訳の問題が出ればどこ

の学校の受験者だつて落第するにきまつている。

通信部は、日暮れ近くなつて閉じた。あのいつもの銀行員が来て月謝を取扱う小さな窓のほうでも、上原君や岩佐君やその他の卒業生諸君が、執筆の労をとつてくださった。そうしてこつちも、かれこれ同じ時刻に窓を閉じた。僕たちの帰つた時には、あたりがもう薄暗かつた。二階の窓からは、淡い火影がさして、白楊はくようの枝から枝にかけてあつた洗たく物も、もうすっかり取りこまれていた。

通信部はそれからも、つづいて開いた。前記の諸君を除いて、平塚君、国富君、砂岡君、清水君、依田君、七条君、下村君、その他今は僕が忘れてしまつて、ここに表彰する光栄を失したのを悲しむ。幾多の諸君が、熱心に執筆の労をとつてくださったのは、特に付記して、前後六百枚のはがきの、このために費されたのが、けつして偶然でないということを表したいと思う。

その翌々日の午後、義ぎえんきん捐金の一部をさいてあがなつた、四百余の猿ざる股またを罹災民諸君に寄贈することになつた。皆で、猿股の一ダースを入れた箱を一つずつ持つて、部屋部屋

を回って歩く。ジプシーのような、脊の低い区役所の吏員が、帳面と引合わせて、一人一人罹災民諸君を呼び出すのを、僕たちが一枚一枚、猿股を渡すという手はずであった。残念なことに、どの部屋で、どんな人がどんなことをしていたか忘れてしまったがただ一つ覚えているのは、五年の丙組の教室へはいった時だったと思う。薄暗いすみっこに、色のさめた、黒い太い縞しまのある、青毛布が丸くなっていた。始めは、ただ毛布が丸めてあるんだと思つたが、例のジプシーが名まえを呼びはじめると、その毛布がむくむくと動いて、中から灰色の長い髯ひげが出た。それから、眼の濁つた赭あから面の老人が出た。そうして最後に、灰色の長く伸びた髪の毛が出た。しばらく僕たちを見ていたがまた眼をつぶつた。かたわらへよると酒の香がする。なんとなく、あの毛布の下に、ウオツカの罎びんでも隠してありそうな気がした。

二階の部屋をまわつた平塚君の話では、五年の甲組の教室に狂女がいて、じつとバケツの水を見つめていたそうだ。あの雨じみのある鼠色の壁によりかかつて、結び髪の毛の女が、すりきれた毛繻子けしゆすの帯の間に手を入れながら、うつむいてバケツの水を見ている姿を想像したら、やはり小説めいた感じがした。

猿股を配つてしまつた時、前田侯から大きな梅鉢うめぼちの紋のある長持へ入れた寄付品がた

くさん来た。落雁らくがんかと思つたら、シャツと腹巻なのだそうである。前田侯だけに、やる
ことが大きいなあと思う。

罹災民諸君が何日ぶりかで、諸君の家へ帰られる日の午前に、僕たちは、僕たちの集め
た義捐金の残額を投じて、諸君のために福引を行うことにした。

景品はその前夜に註文ちゆうもんした。当日の朝、僕が学校の事務室へ行つた時には、もう僕
たちの連中が、大ぜい集つて、盛んに籤くじをこしらえていた。うまく紙撚こよりをよれる人が少い
ので、広瀬先生や正木先生が、手伝つてくださる。僕たちの中では、砂岡君がうまく撚よる。
僕は「へえ、器用だね」と、感心して見ていた。もちろん僕には撚れない。

事務室の中には、いろんな品物がうずたかく積んであつた。前の晩、これを買う時に小
野君が、口をきわめて、その効用を保証した亀かめの子だわしもある。味噌みそ澆こしの代理が勤まる
というなんとか筍さるもある。羊羹ようかんのミイラのような洗たくせっけんもある。草ぼうきもあ
れば杓しゃくし子もある。下駄げたもあれば庖ほうとう刀もある。赤いベベを着たお人形さんや、ロツペン
島のあざらしのような顔をした土細工の犬やいろんなおもちゃもあつたが、その中に、五、
六本、ブリキの銀笛があつたのは蓋けだし、原君の推奨によつて買ったものらしい。景品の説

明は、いいかげんにしてやめるが、もう一つ書きたいのは、黄色い、能代塗のしろぬりの箸はしである。それが何百膳ぜんだかこてこてである。あとで何膳ぜんずつかに分ける段になると、その漆臭いにおいが、いつまでも手に残ったので閉口した。ちよつと嗅かいでも胸が悪くなる。福引の景品に、能代塗の箸は、孫子の代まで禁物だと、しみじみ悟ったのはこの時である。

籤ができればと、原君と依田君とが、各室をまわる労をとった。少したつと、もう大ぜい籤を持った人々がやってくる。事務室の向かつて右の入口から入れて、ふだんはしめ切つてある、右のとびらをあけて出すことにした。景品はほうきと目筈とせつけんで一組、たわしと何とか筈と杓子で一組、下駄に箸が一膳で一組という割合で、いちばん割の悪いのは、能代塗の臭い箸が一膳で一組である。こいつだけは、僕なら、いくら籤に当つても、ご免をこうむろうと思う。

砂岡君と国富君とが、読み役で、籤を受取つては、いちいち大きな声で読み上げる。中には一家族五人ごとごとく、下駄に当つた人があつた。一家族十人ばかり、ことごとく能代塗の臭い箸に当つたら、こっけいだらうと思つてたが、不幸にして、そういう人はなかつたように記憶する。

一回、福引を済ましたあとでも、景品はだいぶん残つた。そこで、残つた景品のすべて

に、空籤からくじを加えて、ふたたび福引を行った。そうしてそれをおわったのはちょうど正午であった。避難民諸君は、もうそろそろ帰りはじめる。中にはていねいにお礼を言いに来る人さえあった。

多大の満足と多少の疲労とを持って、僕たちが何日かを忙しい中に暮らした事務室を去った時、窓から首を出して見たら、泥まみれの砂利の上には、素枯れかかった檜ひのきや、たけの低い白楊が、あざやかな短い影を落して、真昼の日が赤々とした鼠色の校舎の羽目には、亜鉛板やほうきがよせかけてあるのが見えた。おおかた明日から、あとそうじが始まるのだらう。

(明治四十三年、東京府立第三中学校学友会雑誌)

青空文庫情報

底本：「羅生門・鼻・芋粥」角川文庫、角川書店

1950（昭和25）年10月20日初版発行

1985（昭和60）年11月10日改版38版発行

入力：j.utiyaana

校正：かとうかおり

1999年1月11日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水の三日

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>